

II-236 活性汚泥アロセスの濃度変動に関する一考察

京都大学 工学部 (田) 平岡 正勝
 京都大学 工学部 (田) 村上 忠弘
 鐘紡住宅環境研究所 (正) 藤本 政男

1.はじめに 各地の下水処理場では活性汚泥法などの生物学的廃水処理法が中心となっている。しかしながら、処理場においては、流入水質と流入水量の変動が激しく、活性汚泥アロセスが多種類の微生物相により構成されているため、流入水質・流入水量の変動がアロセスに与える影響は十分把握されているとは言い難い。流入水質の変動がアロセスに与える影響を検討する方法としては、動力学的な追求や微生物相の変化や処理特性からのアプローチが考えられるが、今回は一定濃度で馴致した活性汚泥に対して、4種類の濃度の基質を与え、各濃度における溶解性有機物の除去特性から考察を加え、かつ、4時間曝気後の残液をゲル汎過にかけることにより、分子量分布を求め処理特性の変化を求めた。

2.実験方法 京都市鳥羽下水処理場の初期蒸留水を採取し、5B(東洋平紙)で汎過後、エバボレーターを用いて約30℃で濃縮あるいは、水道水で希釈。

投入汚泥は、水道水を用いて空曝気で洗浄し、処理場での採取後、6時間以内に使用した。エバボレーターで30℃で濃縮の段階で下水中の有機物質に性状的な変化が起っている可能性があるが、本実験では変化はないとした。

測定項目は表-1に示したものであるが、実験時の試料採取間にサンプリング

i. COD, BOD, ゲル汎過の試料は5Bの平紙で汎過した

ii. SSとMLSSはその場で測定した。

測定項目	測定法
水温	JIS-K-0102
COD-Cr	下水道試験法
BOD ₅	JIS-K-0102
SS	メンドレーフィルターによる変法
MLSS	下水道試験法

表-3 測定項目と測定法

	COD	BOD	MLSS
Run A	1130	151	2870
Run B	436	72	2720
Run C	286	41	2630
Run D	143	17	2430

(PPM)

系 列	Run. A	Run. B	Run. C	Run. D
実験用曝気槽容量	2ℓ	2ℓ	4ℓ	4ℓ
希釈・濃縮率	5倍濃縮	2倍濃縮	原水	2倍希釈
活性汚泥投入量	340 ml	340 ml	680 ml	680 ml

表-2 実験の概略

3. ゲル汎過

i) 試料の調整

曝気4時間後の試料を5Bの平紙で汎過し、エバボレーターを用いて30℃で10倍に濃縮し、その後、再び5Bで汎過した。

ii) ゲル汎過

ゲル・セクション G-25 カラム 径2.5 cm 長さ60 cm 展開液は蒸留水
 通水速度 65.5 ml/hr

なお、実験前に、ビタミンB₁₂、フルーデキストラン2000を用いて、その展開位置により、分子量の検量線を求めておいた。

iii) 測定項目

各フракションを波長220 m μ , 260 m μ で測定。
 COD-Gは3本一組にして2/5法で測定した。

分析項目	試験法
紫外吸光度	島津UV 200
COD-Cr	下水道試験法

4. 結果と考察 Run.A～Run.Dの淨化アロセスを図-1に示す。Run.A～Run.Dにおいて除去率は一定であり、除去率に関しては濃度によって大きな変動ないと考えられる。最初の20分以内に初期吸着により大部分の有機物が除去されているので、除去曲線を $\alpha t < 20$ (min) 20 min くちに分割し、一次反応に従うと仮定してCOD-Crについて反応速度定数を求めたものを表-4に示す。各濃度における反応速度定数の濃度依存性を最小自乗法によ

って求めると、 $0 < t < 20\text{ min}$ $k_1 = -2.25 \times 10^{-5} + 1.09 \times 10^{-6} C_m (\text{COD-C}_r)$
 $20\text{ min} < t$ $k_2 = -2.5 \times 10^{-6} - 2.34 \times 10^{-8} C_m (\text{COD-C}_r)$

となり、濃度依存性は大きくな。

4時間曝気後の残液と原水(初期溢流水)をゲル通過にかけた結果を図-2～図-6表-5に示す。残存有機物質を分子分画し、濃度の変動による生物処理の挙動を分子量分布の面より考察した。各Runでのサンプル濃度の差によるピークの分離・合併が見られるが、Run.A～Run.Dと基質濃度が低くなるにつれて、各ピークが低分子側に移行しているのがわかる。特に活性汚泥を割換した濃度以下であるRun.Dにおいて、より溶解性有機物の分解がより進んでいることがわかる。また、Run.C, Run.Dでは、ピークⅢ付近(分子量約1000)におけるE260成分の除去がRun.A, Run.Bよりも大きい。

4. 結論

- (1) 設定した濃度によって反応速度定数の変化は認められなかった。
- (2) 設定した濃度変動に対して、残存する溶解性有機物の分子量分布のパターンは変化しないが、基質濃度が低いほど、低分子側に移行する。より低濃度の基質の方が上記の傾向は大きい。

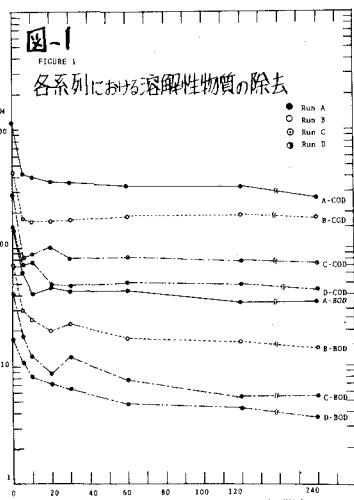


表-5 各系列におけるピークの移動

ピーク	I	II	III
原水	9~13	18~22	22~27
Run A	11~13	18~22	22~27
Run B	9~12	21~24	25~28
Run C	9~13	21~23	24~34
Run D	21~24		34~39

I; 分子量 2000付近

II; 分子量 1400付近

III; 分子量 1000付近

共同研究者は前記の3名と
堀井安健(京大工学)の4人である。

表-4 反応速度定数

	$0 < t < 20\text{ min}$ $k_1 \times 10^{-4}$	$t > 20\text{ min}$ $k_2 \times 10^{-6}$
Run A	-11.6	-30.7
Run B	-14.2	-8.46
Run C	-20.3	-12.6
Run D	-22.5	-8.17

k (1/hour · MLSS)

